

27 まるっきりの日記

星野博美

昨日、喫茶店で日記を書いた。

日記は、三冊百円の大学ノートに、一ダース六百円の四Bの鉛筆で書く。

昨日はあまりに書くことがなかったので、「人の多さに辟易する」「スマホを家に忘れてきたので遊べない」「寒すぎだろ、この店」「ジーパンがさすがにきつい」「あさっては区役所に行く」などなど、ひとしきり

実況中継をしたあと、最後にこう書いた。

「まるつきり、本当の日記だ」

その通り、私が書くのは、どうでもいいことばかりだ。格安SIMカード各社の月額料金比較や、原稿の行数をはじめ出す計算式、難しい漢字の練習など、なんでも書く。ちなみに昨日は「蹂躪」という漢字を何度も練習し、そらで書けるようになった。

日記の地位が下がったという言い方もできる。その証拠が、日記にかける投資金額の低さだ。この上もなく安く済ませている。かつて、原稿用紙に万年筆で書いていた時期もあったのだ。思い返せば顔から火が出そうだった。それほど投資すれば、肩に力が入り、もったいなくてまるつきりの日記など書けなくなる。実際その時代は、妙に人目を意識した――

とはいえ、誰にも見せる予定などなかったが——、すかした日記を書いていた。

長い時間を経て、ようやくここまで日記の地位を下げたのである。

日記を意識的に書き始めたのは大学一年の時だ。

実にくだらない自意識からだった。

高校三年生の冬から一年あまり、とある小劇場の稽古場に通い、雑用を手伝っていた。別にたいした目的はなかった。不良の大人の空気を吸いたかっただけだ。当時はそんな若者が少なからずいた。

どんな世界にも、「トリマキ」という種族が生息している。下品に言えば、グループピー。演劇でも音楽でも写真でも映画でも、私がいま身を

置く文筆の世界でも、彼らの生息が観測できる。

その世界に興味がある、本当はその世界で生きていきたい、しかしそこまで本気ではないし、血のにじむような努力は御免だ、とりあえずその世界で生きる人にくつつき、住人のふりをしよう、というのがトリマキの生息。要はヤドカリ族である。私もまさにその予備軍だった。

演劇なら、稽古場に入ったりして雑用をこなしたり小道具を準備したり、小劇場へチラシを配りに行ったりするのが、トリマキの初歩。もちろん、チケットはたんまり託される。チケットの売り上げがよいとか、多少みどころがあるとか判断された場合は少し格が上がり、公演の受付などに回され、「制作」の下っ端となる。私の場合、チケットはちっとも売れやしない——第一、友だちがいない——し、見どころは一つもないわで、

そこには格上げされなかった。役者や演出家から手をつけられ、特定の「女」や「男」になると、さらに格が上がる。トリマキにも厳格な、しかし下剋上の可能性もあるヒエラルキーがあった。

様々な小劇場に在籍する役者やトリマキたちと飲みに行く機会も多かった。当然、最近見た誰々の芝居の寸評や批判や噂に花が咲く。そして必ず、この話題になる。

「いま、何やってるの?」

役者なら、あらたに稽古が始まった芝居や劇団の名前を答えればいい。トリマキなら、どこの手伝いをしている、と言えば体裁が保てる。

この質問は、本当に何をしているかではなく、所属先を軽く尋ねているだけなのだ、いまならわかる。しかし若かった当時は真に受けてし

まった。

その日、渋谷・宇田川町の飲み屋で、やはりそんな話題になった。自分の番が回ってきた。

ちようどその頃、そろそろトリマキから足を洗いたいと思い始めていた。自分はどうも、集団で何かをすることは苦手らしい。しかも、本末転倒なのだが、演劇がそれほど好きではないことに気づいてしまった。周囲で繰り広げられる、乱れた男女関係にうんざりしたことも理由の一つだった。

しかし不良な大人たちの前で「真面目に大学に通っている」と言えば馬鹿にされるだけ。かといって、何かを書いているなどと、嘘八百を並べるわけにもいかない。内容を聞かれたら一発で嘘だとバレる。

どうしよう。嘘ではなく、何もしていないことにならないことは。そういえば最近、日記を書き始めたではないか。

「日記を書いています」

とつさに口をついて出た。

一瞬しんとしたあと、「で？」と一人の制作部のトリマキから問い返された。

「だから、日記を書いてるんです」

失笑の渦。彼らにとって、日記を書くことは「何かをしている」ことにはならないらしい。私の返答があまりに退屈だったらしく、おのおの違う話題へ移っていった。

敗北感とは違う。惨め、とも違う。強いていえば、淡い怒りと虚脱感。

役者はともかく、少なくとも、トリマキ連中に笑われたくないんだよ。小劇場の世界から距離をおいたのは、それからじきだった。

日記を書くことだけはやめなかった。意地でもやめなかった。

万年筆で原稿用紙に書いていたのはその頃だ。

「何かをしている」ことの代替行為として日記を選び、意地で書く。

しかし「何かをしている」わけではないから、書くことはすぐに底をつく。ならば何かをすれば書くことも増えるだろうに、何がしたいかわからない。それがわかっていけば、そもそも日記を書く必要すらない。

だからこそ、万年筆と原稿用紙という装置がぜひとも必要だった。

当時の自分に言ってあげたい。日記には、特別な事など書かなくてよ

かったのだ。日々の、雑記なのだから。

ずいぶん、回り道をしてしまったね。

逆に最近では、派手な出来事は日記に書かなくなっている。楽しかったことは、特に。

ある出来事が発生し、仮にそれを楽しいと感じたならば、その出来事は成仏できる。あまり宗教用語は使いたくないが、この感覚を説明できる適切な語彙がほかに浮かばない。まさに「成仏」という感覚に近い。

短い時間で受け止められる自信のない出来事や衝撃も、即刻は書かない。それらはいずれ、間違いなく書くことになる。その時が来たら、書けばいい。

私はいま、食事や排泄と同じような位置づけで日記を書く。

「日記を書いている」

いまなら堂々と、そう言う。その行為自体には、何の意味もないのだから。